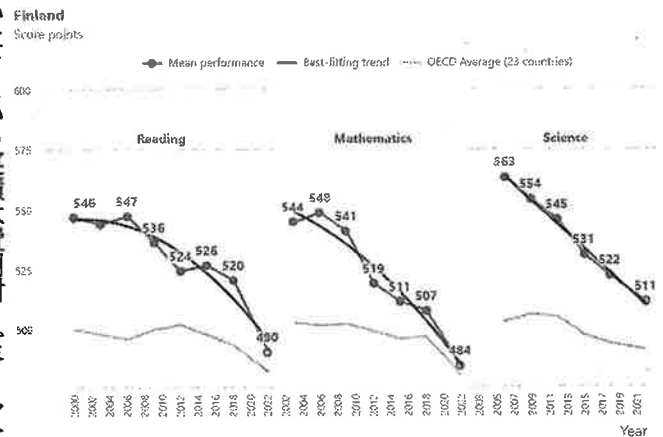




大学教員をしているときまざまな問い合わせがある。その中で増えているのが中学生からの問い合わせである。自らがテーマを考えて調べる「探究」(総合学習)のために、ネットで調べるとすぐに専門家が見つかるので質問する。企業のホームページからも手軽に問い合わせができることから同様の質問が増えている。中学生が研究に関心を持ち、意欲的な質問をする。これは研究者にはうれしいことであり、筆者は可能な限り応えるようにしている。しかしながら、質問が漠然としている場合などは、聞いていくと学校の課題で嫌々調べていることがわか

フィンランドの学力低下



出典：OECD ' PISA 2022 Results: Factsheets Finland' 2023年12月
https://www.oecd.org/en/publications/pisa-2022-results-volume-i_53f23881-en.html

いた」という実績は費用対効果でよい取り組みとなる。学校教育の現場では、「アクティブラーニングで創造性を高める学習をしているフィンランドは素晴らしい。日本の教育は見習うべきだ」という意見が未だ

確かな学力に 基づいた「探究」を



水野 英雄
 大学准教授
 名古屋大学
 現代マネジメント学部

る。中学校の教員は自分自身が多忙であり、大学の教員の指導を受けて「中学生が大学生のような論文を書

に多い。しかし、現実には図に示すようにフィンランドでは学力低下が課題となっており、義務教育期間の延長が行われた。学力が低下した理由は、教科横断型のアクティブラーニングの時間は増えた一方で、各教科の時間が減ったことで基礎学力が低下したためである。

創造的な活動で成果を挙げるためには多くの知識が必要となる。例えば、生徒や学生は「理想の教育とは」

をテーマにしたがるが、教育課程の途中にある生徒や学生では中途半端な知識の状態であるために全体像が見えてこない。全ての教育課程を修了したからこそ、どこが良くて悪いか評価できる。また、社会人になって、「こういった知識が必要であった」ということがわかるようになって初めて「理想の教育」が見えてくる。生徒や学生では、知識の裏付けがないために説得力のない教育論になってしまう。正しい知識がないとアクティブラーニングの成果は得られないのである。

「探究」(総合学習)で何をすべきかは中学校の教員にとっては悩ましいことであるが、「指導できないことは指導しない。」で、大学で行うような研究をさせるのではなく、中学生にふさわしい基礎学力の充実につながる取組をすれば十分な教育成果となる。また、大学生と同レベルの研究よりも、「中学生ならではの気づき」があることが大切である。

みずのひでお 国際経済学、経済政策、経済教育。名古屋大学大学院経済学研究科博士課程後期課程退学。